

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 11 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380702

研究課題名(和文)被爆表象・言説の批判的エスノメソドロジー：「被爆の記憶」の語り方の解読

研究課題名(英文)The critical ethnomethodology of A-bomb images and discourses

研究代表者

好井 裕明(YOSHII, Hiroaki)

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：60191540

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：被爆問題をテーマとした映画(純愛映画)とNHKで放映された被爆ドキュメンタリーをもとに被爆表象の理解や「被爆の記憶」の伝え方(「方法」)の特徴として「定型化する力」と「個別化する力」を明らかにした。また広島市平和記念資料館の地下にある情報資料室に通い、禁帯出として保管されている資料(大衆週刊誌、月刊総合誌、学術雑誌、教育関連雑誌など)を渉猟し、重要な資料を選定し、複写した。それらは約600点にも及んだが、さらなる解読のための資料として整理し、ファイル化した。

研究成果の概要(英文)：I made two papers, the one which ethnomethodologically analyzed the movies of pure love, and the other which analyzed Hibaku documentaries. I discussed the meaning of competing two powers, that of stereotyping and that of realizing, as the ethnomethods of representing and telling the "Hibaku no Kioku" in these papers.

And I went to the Hiroshima Peace Memorial Museum Library, and read the forbidden lending data extensively, and selected and copied the important data for analyzing how to tell the images of A-bomb problem and the "Hibaku no Kioku. These data accounted about 600, were filed for further analyzing.

研究分野：社会学

キーワード：被爆問題 差別・排除 映画の社会学 映像分析

1. 研究開始当初の背景

被爆問題の社会学は、主に被爆者への生活史聞き取りという質的調査の営みを通して被爆体験に固有の苦悩や生のありようを明らかにしてきた。また質問紙調査をもとに「原爆体験」の実態や問題点を量的にも明らかにした濱谷正晴『原爆体験』(岩波書店、2005年)、原爆の絵がもつ意味を自己言及的に解説した直野章子『原爆の絵と出会う』(岩波書店、2004年)のような研究も存在する。また原水爆映画の分析という点では、Mick Broderick『ヒバクシャ・シネマ』(現代書館、1996年)が先駆的研究として非常に意義深い。近年、若い世代による新たな戦争社会学の展開があり、大衆文化や報道での人々の受容過程を詳細に跡付け、メディアでの戦争の記憶をめぐる力学を論じた吉村和真・福間良明編著『「はだしのゲン」がいた風景』(梓出版社、2006年)、福間良明『焦土の記憶』(新曜社、2011年)、福間良明・山口誠・吉村和真編著『複数のヒロシマ』(青弓社、2012年)など優れた研究書が刊行されている。特に福間たちの研究は戦争をめぐる記憶の継承のありようを詳細な資料から跡付け、そこにどのような力学が働いていたのかを検証しようとし、従来からある戦争をめぐる語り方に新たな可能性を開いていく魅力あるものと申請者は評価している。

2. 研究の目的

2011年3月の福島原発事故以降、「被爆(被曝)」というできごとに改めて関心が向けられている。被爆体験の継承は現代日本が達成すべき重要な課題である。しかし戦後70年が過ぎ被爆者の高齢化が進み直接的な被爆体験の語りの継承は今後ますます困難となりつつある。直接的な体験語りも希少となり近い将来それが終わることが予想される現在、いかにして被爆の記憶を継承しその意味を常に新しく創造できるのか。

申請者は、被爆というできごとがこれまでどのように伝えられてきたのかを今こそ詳細に解説しその方法や問題点を検討した上で継承に効果的な語り方を検討すべきだと考えている。本研究ではこの関心から映画など映像資料および新聞記事言説を解説し被爆をめぐる語り口(ethnomethods)を明らかにしたい。

3. 研究の方法

(1)まず映像解説に必要な設備備品を購入し、市販され、入手可能な被爆問題をめぐる日本映画、また被爆それ自体を中心テーマとはしていないが映画の流れの中で被爆表象が描かれている映画作品のビデオやDVDをできるかぎり購入する。すでに被爆問題関連の映画やドキュメンタリーはある程度資料として、申請者は所持しているが、近年新たな映画やドキュメンタリーが製作公開され、またこれまで視聴が難しかった映画やドキュメンタリーも新たにDVD化されており、そうした作品も含めて市販状況を調べ、購入する。またできるかぎり、テレビ放映される被爆関連番組や過去放送されたアーカイブ映像再放送の映像を録画し、データとして収集する。

(2)8月6日や9日にあわせて新たに放送される被爆問題関連のドキュメンタリーを録画し、データ化するとともに、すでに先行科研で収集しているNHK被爆ドキュメンタリー内容の詳細なデータを整理し、その内容やストーリーや特徴を個別作品ごとにまとめていく。

(3)映画やアニメなど一般公開された作品は、公開当時の評価は解説にとっても重要である。そのため平行して、キネマ旬報など映画雑誌における当時の評価や評論の言説、新聞での広告メッセージや映画評も収集し、その関連性を調べる。

(4)より詳細な解説の対象となる作品を選定し、個々の作品について映像やナレー

ション、セリフ、音楽などの関連を注視しながらエスノメソドロジ的な解読に耐えるトランスクリプトを作成する。この作業は、映像の一コマコマのシークエンスをみていく作業であり、かなり時間がかかる。そのため科研期間内で収集された映像についてすべて作業を貫徹することは不可能であり、科研終了後も適宜、新たな解読のための作業をすることが必要となる。

(5)トランスクリプトをもとにして、被爆表象のありようを詳細に記述し、それが作品のなかにどのように「埋め込まれているのか」などを、今一度作品全体を反復視聴し、分析を進める。その際、あくまでも、映画やドキュメンタリーで具体的な映像がいかにか描かれ、いかにか語られているのかを注意深く視聴し、映画それ自体からは離れることなく、研究者の実感から感じ取れる主観的な意味を重視する。

(6)上記の映画やドキュメンタリーの映像収集・データ化、個別作品の詳細な解読作業と平行して、広島市平和記念資料館の地下にある情報資料室に通い、禁帯出となっている終戦後すぐから1970～80年台までの大衆雑誌、総合論壇誌、学術雑誌、週刊漫画、教育雑誌、芸術系の雑誌、地元企業社内誌など、保管されている雑誌を細かく渉猟し、被爆問題関連記事で必要なものを選定し、複写する。

(7)複写した雑誌記事は、今後詳細なる分析に耐えられるようにファイルに整理する。本研究期間で、すべての記事を分析することは不可能だが、科研終了後も整理された資料をもとにして適宜、解読論文を執筆する。

デジタルデータ化した20000枚にも及ぶ原爆（反核・平和）関連問題記事を整理し、特に詳細な分析対象となる調査報道（特集）記事を年代ごとに整理する。そのうえで、特集記事言説で原爆被害者など被爆表

象がどのように描かれ、語られているのかを詳細に調べ、その「語り口」を分析する。

4. 研究成果

一般的な娯楽映画のジャンルである純愛映画で被爆者がどのように描かれているかを『その夜は忘れない』（吉村公三郎監督、1962年）と『愛と死の記録』（藤原性繕監督、1966年）の2作品を中心として詳細に解読し、論文化した（後述雑誌論文）。そこでは悲劇の象徴としての被爆者イメージが創造され、その絶対的不幸で壊れてしまう愛の姿が描かれていた。こうした被爆者イメージは当時多くの人びとが抱いていた原爆被害者や被爆問題への定型化された了解に響きあうものである。

平行して被爆ドキュメンタリーの映像解読を進め、その一端を論文化した（後述雑誌論文）。本論文では、NHKスペシャル「なぜ助けられなかったのか……～ヒロシマ・長崎7000人の手記～」（1990年8月2日放送）ETV特集「昭和20年 被爆の言葉 第一夜 被爆の証として」昭和20年 被爆の言葉 第二夜 ヒロシマの心の芽生え」（1996年8月7・8日放送）、NHKスペシャル「サダコ～ヒロシマの少女と20世紀～」（1999年8月6日放送）という作品を取り上げ、映像とナレーションを詳細に解読することで、視聴する側に働きかける「定型化する力」と「個別化する力」を例証した。そして被爆表象を考えていく上で、この二つの力の過剰が問題となること、そのバランスこそが、被爆の記憶を継承していくために重要な「問題」となることを論じた。

また広島市平和記念資料館の地下にある情報資料室に何度も出かけ、保管されている禁帯出資料をできるかぎり閲覧し、言説分析に必要な資料を選定し、複写した。具体的には『婦人倶楽部』『婦人之友』『婦人生活』『婦人朝日』『ヤングレディ』『ミスス』

などの女性雑誌、『アサヒグラフ』『毎日グラフ』『太陽』などの写真雑誌、『週刊朝日』『サンデー毎日』『週刊読売』『週刊現代』『朝日ジャーナル』などの週刊誌、『中央公論』『婦人公論』『思想の科学』『潮』『リーダーズダイジェスト』など月刊総合誌、『歴史評論』『歴史地理教育』『広島教育』『家庭と教育』など学術誌や教育問題誌、さらには『高1コース』などの大学受験雑誌、『マーガレット』など週刊漫画雑誌、地元銀行や国鉄労組、RCCなど地元マスコミの社内誌、福島町など広島市内地域で出された被爆体験手記集など約600点を選定し複写した。膨大な数にのぼる資料であり、現在分析に利用できるよう整理をした。言説分析に関しては、以前の科研で収集している新聞報道記事とあわせて、今後少しずつ成果を形にしていきたいと考えている。

本研究では、「製作された」映像・言説のなかに、平板化され、個別の人生等歴史性が語りつくされていない被爆イメージをめぐる描き方や語り口の特徴が明らかになった。本研究から得られる成果は、私たちの日常生活世界で維持されている偏った被爆問題イメージを説得的に例証できる資料となり、同時に、今後日本社会に対して要請されている、より意味に満ちた「被爆の記憶」の継承という実践的な課題を達成するために、どのような新たな被爆をめぐる描き方や語り口が創造できるのかを模索する重要な資料を提供できると考えている。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

好井裕明「定型化する力と個別化する力 被爆を描くドキュメンタリーを解読する」『理論と動態』第7号、社会理論・動態研究所、2014年、21-39頁、査読有

好井裕明「純愛映画で描かれる被爆者表象を読み解く」『社会学論叢』第177号、日本大学社会学会、2013年、19-48頁、査読無

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者
好井 裕明 (YOSHII Hiroaki)
日本大学・文理学部・教授
研究者番号：60191540

(2) 研究分担者
()

研究者番号：

(3) 連携研究者
()

研究者番号：